

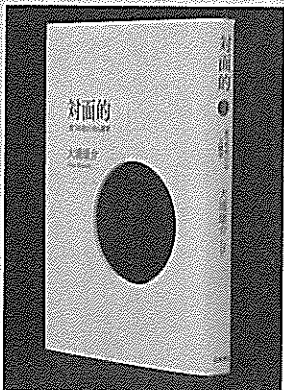
評・伊藤 亜紗 (美学者  
東京工業大准教授)

こんなになが下キ下キする哲学的な本は珍しい。その理由は、筆者がまさに「対面的」に書いているからだ。本がテーマを実践している。

誰かと向き合い、見つめ合ったとき、私たちがその「磁場」のよつなものと捉えられる。この磁場は、一方では倫理的なものだ。人は、見つめ合う相手を物のように扱ってはできない。ボクサーが対面しながら殴り合うのは、抑制が働くからだと言つ。対面がフェア・プレイを下支えている。

他方で見つめ合うことは、私たちの中の動物的な生を呼び覚ますトリガーにもなる。見つめ

## 他者の生に向き合う



◆おおうら・やすすけ  
1951年生まれ。京都  
大教授。専門は文学・  
表象理論など。著書に  
『誘惑論・実践篇』。

大浦康介著

筑摩書房 2900円

## 対面的 <見つめ合い>の人間学

合うと緊張するのは、相手が何をするか分からず、場の制御が不能になるからだ。挨拶を交わすときのような儀礼性が剝ぎ取られ、ひとつの生き物としての予測不可能性がむき出しになる。そこで人は、コリラがそつするように、顔の表情や、場合によっては全身の姿勢から、相手の意思を読み取るうとするだろう。

本書が対面的だと言つのも、まさに「生き物」が書いている」としか言いようがない筆運びのライブ感があるからだ。全体は73の断章から成るが、決闘、キス、ひきこもり、犬、ツイッターとさまざまなモチーフを捉えては一気に深く潜る。哲学が参照されたかと思えば動物行動学に話は移り、文学や人類学も援用される。しかし散漫さとは無縁で、あの断章の次にこの断章があつてこそ生まれる意味が彫り出され、かと思えば日記のような筆者の気づきが不意に挿入されたりする。

確かに「対面」は、時代に逆行するテーマだ。いまや私たちは、ネットワークに媒介された、匿名でさえある時代に生きていているのだから。思つた、「匿名」の対義語は「実名」ではないのではないか。失われつつあるのは、むしろ著者の言つ「無名」レベルの交わりだ。対面的な場においては、社会的な役割や肩書きは無化され、人は他者の生そのものに向き合うのだ。